巨大なる水腎の1症例 附本邦症例の統計

三樂病院皮膚泌尿器科 伊藤 昇, 常光純夫
(醫長 小嶋理一)

N.Itô and S.Tsunemitsu : A Giant Hydronephrosis;
Statistics of Japanese Cases.

内容11以上の水腎の報告は比較的稀である。我々は原発性腎癌を伴い、腹腔の約 $\frac{2}{3}$ を占め、その内容41に及ぶ水腎を死後解剖によりて判明せるものを経験したので之を述べる。

症例：患者 39歳男子， 教員， 家族歴：母が子宮癌にて死亡せる外特記すべきことなし。既往歴：幼時より腹部が大きいと云はれた。34歳時左側肺浸潤。現症歴：4~5年來時々腹部の緊張感と疼痛があつた。昭和21年7月下旬尿の白濁せるに氣付き、醫師を訪れ膀胱カタルの診断の下に醫治をうけ輕快した。同年9月中旬宴會にて飲酒せる所突然血尿が起つた。併し排尿痛、尿意頻數はなかつた。血尿は其後絶えずあり立川病院にて診察を受けたが診断は保留せられた。11月中旬に至り、咳嗽、熱感、肩の凝りがありその上胸痛が時々あり、其頃腹部の膨隆に氣付いたため慶應病院を訪れ尿管カテーテル法で左側は尿管下半部まで挿入腎孟像は得られず診断は決定されなかつた様である。血尿は依然としてあり、腹部の腫脹も一層甚だしくなつたので、立川病院にて腹部穿刺をうけた所尿と同様の液約2000ccを得た。これと共に血尿はとまり淡黄色の澄明なる尿が出る様になつたが、5日後には再び血尿となつた。腹部の疼痛も生じて來たので同年12月11日當科を訪問直ちに入院した。

入院時所見：一般所見、稍瘠瘦し顔面は蒼白である。脈膊は規則正しきも稍頻數、咳嗽喀痰あり。食思不振、肺肝境界右第5肋骨、打診上左肺後下部稍短濁、右肺正常濁音、聽診上肺全野粗、肝脾觸れず。局所所見、腹部は膨隆し蛙腹の状態にある。腹部左半は右半より膨隆の度が強い。打診するに上腹部は鼓音を呈し臍部より上方約4横指斜上方では全體濁音を呈し左腹部の中央に穿刺の癰痕を認む。それより下部内方に表面粗顆粒狀にして一部弾力性硬一部堅い腫瘤をふれる。腹部左半は壓痛あり特に腫瘤をふれるところは壓痛が強い。膀胱部は稍壓痛あり。陰莖、睪丸、副睪丸

は正常、前立腺は硬度稍増大す。鼠蹊、大腿部淋巴腺は數ヶ豌豆大に觸れる。血液所見、赤血球 371萬、白血球 8000、血色素(ザーリ) 60%，白血球、淋巴球 23.5%，單核及び移行型 7.5%，エオジン嗜好細胞 2.5%，中性嗜好細胞 66.5%，赤血球沈降速度 30'/—44 1°—94 2°—114 24°—146、殘餘窒素 40.6 mg/dl。尿所見、前後兩杯共に血樣混濁し酸性、蛋白陽性、赤血球は多數に認め上皮細胞白血球も中等度に認む、細菌は認められない。排尿回數晝間 4—5 回夜間 2—3 回。

入院後経過：入院翌日内科にて腹膜炎の疑を受け尙胸部にも所見ありと思はれたが其後種々の検索の結果腹膜炎はなく腹部腫脹は腎臓のみによるとの事にて當科にて尿管カテーテルリスマスを施行す。インデゴ排泄は左側尿管よりは絶えず血様の尿の排泄あるため排泄時間の測定は不能にして右腎は 7/30' にて濃青色。カテーテル尿は右腎は正常、左腎より得られたものは膀胱尿と同一所見であつた。腎孟レ線像はカテーテル抜去せるためか腎孟像は得られなかつたが左腎部位に石灰化?の像が見られる。其後胸部壓迫感、呼吸困難脈膊頻數となり咳嗽も激烈となる。貧血も顯著。12月25日には血色素 45%，腹部穿刺により 400 cc のチョコレート色の液を得たがそれ以上は得られなかつた。諸症状は幾分輕快し尿も清澄となつたが數時間後に再び胸内苦悶腹部疼痛が起つて來た。尿は12時間後には再び血尿となつた。26日輸血施行。27日腹部穿刺をなし 500 cc を得た。尿は前回同様澄明となつたが短時間にして舊に復した。諸症状は益々増悪し29日夕刻死亡す。翌30日死體解剖を施行す。

剖檢所見：腹部所見：2, 3 條の小腸を左側に壓排すれば殆んど腹部の $\frac{2}{3}$ を占める腹膜にて被はれた腫瘤をみる。右下部に於て下行結腸と腫瘤の前面との緊密なる癒着がみられる。

胸部所見：横隔膜は著しく上方に押し上げられ特に

左側に於て甚だしい。體壁肋膜、横隔膜には灰白色の硬き小豆大より蠶豆大に至る腫瘤があり兩側肺尖部には肺と肋膜は強く癒着す。

左肺：355 gr 22 × 20cm, 肋膜には粟粒大より小豆大の腫瘍轉移がみられる。肺門部殊に下葉に於ては氣管支の周圍に腫瘍轉移が認められ肺門淋巴腺に及んでいる。左肋膜腔には血様液 1800 cc あり。右肺：550 gr. 上葉には陳舊性の結核巢が所々に見られ下葉の上部にも同様のものを見る。併し進行性の結核巢は見られない。肺門部腫瘍轉移は軽度。主として中葉肺門部

に見られるにすぎない。

脾：特記所見なし。左腎：560gr+4000cc 29×15cm 人頭大の囊腫にして下極に鴉卵大以上の稍扁平なる腫瘤あり、これは腫瘍組織の如く見え腎組織は殆んど見ることが出来ない。腫瘍の後面に尿管あり囊腫と通ずる。囊腫の内面は平滑。腫瘍の囊腫面は不規則顆粒狀、僅かに褐色の苔をもつ。右腎：170gr, 18×12×4cm。1ヶの囊腫あり。腎盂は擴大しているが、全體として大きさに變りはない。

組織學的に腎臓の腫瘍は單純癌にして肺には腫瘍轉

(表) 内容 11 以上を有する水腎の症例(本邦文献例)

報 告 者	年齢	性	原因, 現症	大 き さ	罹患側
宮 田	42	男	癌に變化	2000cc	左
岸	36	男	結 石	7000	
大 島	35	男	結 石	3800	
朝 倉	47	男	不 明	3000	
穂 積	20	男	結 石	9000	
杉村, 濱 田	53	女	結 石	1200	
池 田	21	男	不明 ^{先天性?} 外傷	6000	右
都谷枝	33	男	先天性, 外傷	23000	馬蹄腎
皆 見	23	男	尿管壓迫	29300(g)	右
高 橋	53	男	不 明	12000	左
〃	5	男	不 明	3000	左
野 口, 三 浦	18	男	先天的?	5700	左
永 井	27	男	アトニー	25000	左
緒 方	23	男	不 明	3030	
竹 内, 玉	51	男	結石(癌變性)	3000	左
市 川, 矢 澤	19	男		3200	左
林	31	男	先 天 性	20350	左
北 川(誤)	32	女	尿管起始部不明	2500	左
〃	36	男		2000	左
高 岡	21	男	尿管狹窄	2000	左
西 山	6	女		1500	左
奥 谷	37	男	先 天 性	5000	右
木 原	36	男	尿管狹窄	2000	左
杉 若	25	男	先 天 性	6000	左
前 田, 佐々木	25	男	尿管狹窄	5200	右
伊 藤, 常 光	36	男		4000	左
北 川, 宮 内	29	男	異常血管	1000	左
井 尻	32	男		3630	左
牛 島	32	女	癥 痕	2000	右
山 崎	30	男	外 傷 性	7100	
木 全, 二 宮	34	男	結 石	1150	右

移を證明す。

以上我々は腎臓癌を合併せる巨大なる水腎を有せる 1 症例を報告した。その既往歴並に現症歴より考察するに該患者は先天性に水腎を有し最近に至りその一部癌性に變化し尿管の壓迫を來し一層その内容を増し種々の壓迫症狀を來し、又浸出物及び癌の肺轉移のため呼吸困難を起し死亡せるものと思はれる。

我國に於けるかゝる巨大なる水腎については竹内、王氏が之を述べているが我々は其後の症例を蒐め内容 11 以上に及ぶもの 31 例(我々の症例をも含めて)を得たので、この統計的觀察を試みた。〔表参照〕上記の表を見るに 31 例中女子は僅かに 4 例にて男子は 27 例である。又罹患側はその判然せるもの 24 例。内左側 18 例右側 6 例で左側に好發している。年齢は大部分 20~30 歳代にみられている。Stirling は内容 11 以上の水腎 33 例を文献により蒐集し、性、年齢、患側について特別のことはないと報告しているが我邦のものは可成り特なものがある。

結語 1) 我々は 39 歳男子におそらくは先天性と思はれる内容 41 に及ぶ巨大な水腎とこの一部に單純

癌を併發せる症例を報告した。

2) 内容 11 以上に及ぶ我國に於ける水腎の統計的觀察に於て、性、年齢、罹患側に關し、特異の所見を得た。即ち男性にして、20~30 歳代に特に多く、左側に好發している。

文 獻

- 1) 永井：日泌會誌 23 卷 3 號, 2) 市川, 矢澤：日泌會誌 32 卷 1 號, 3) 竹内, 王：日泌會誌 25 卷 10 號, 4) 林：日外會誌 42 卷 9 號, 5) 北川(誤)：日泌會誌 30 卷 4 號, 6) 高岡：皮と泌, 7 卷 6 號, 7) 西山：北越醫會誌 54 卷 3 號, 8) 奥谷：日鐵醫協會誌 24 卷 1 號, 9) 木原：東京醫事新誌 3094 10) 杉若：日泌會誌 24 卷 10 號, 11) 前田, 佐々木：日外會誌 39 卷 2 號, 12) 北川, 宮内：日泌會誌 20 卷 11 號, 13) 井尻：日泌會誌 21 卷 8 號, 14) 牛島：東北醫誌 19 卷 11 號, 15) 山崎：日外會誌 38 卷 2 號, 16) 木全, 二宮：皮紀要 36 卷 1 號, 17) Stirling: J. Urol., Vol 42, 1939.

學 會 抄 録

第 60 回 札幌地方會

(昭和 18 年 9 月 18 日於北大)

北大に於ける尿路結石の統計的觀察

新山 榮, 礪原温佐 (北大)

大正 14 年より昭和 17 年に至る間、北大皮膚科泌尿器科にてとりあつかつた 118 例の尿路結石症について、統計的觀察を試みた。

(1) 結石の部位的分布 14 例に 2 個以上の結石を認め、腎結石 41 例(30%) 尿管結石 26 例(20%)、膀胱結石 52 例(44%)、尿道結石 5 例(4%)、上部尿路結石：膀胱結石=52%:48%である。(2) Steinwille に就て歐洲方面でとなへられた、Steinwille に就いて考察してみたのであるが、昭和 8 年頃より次第に増加の徴を見せ、昭和 12 年に於て最高に達し、19 例を記録しており、うち 16 例は上部尿路結石であり、膀胱結石症は 3 例にすぎない。然し昭和 14 年度に於ては却つて膀胱結石症の壓倒的増加を認めており、足型的 Steinwille を示してはならない。(3) 月齡的

關係 1 歳~10 歳は 10 例(8%)、11 歳~20 歳は 5 例(5%)、21 歳~30 歳 24 例(20%)、31 歳~40 歳 23 例(19%)、41 歳~50 歳(25%)、51 歳~60 歳、12 例(9%)であり、70 歳以上は極めて少數である。更に 20 歳~60 歳に於ては上部尿路結石が斷然多く、20 歳以下及び 60 歳以上には膀胱結石が多い事は注目すべきである。(4) 性別 男 104(92%)、女 18 例(13%) 不明 1 例、男：女=6:1 である。(5) 臨牀的症狀 記載明瞭なり 71 例中殆んど全例に見られるのは血尿であり、仙痛は腎結石に 12 例、尿結石に 10 例、膀胱結石に 5 例見られた。頻尿は當然膀胱結石に多く、17 例、尿管結石に 2 例、腎結石に 1 例見られた。鈍痛は腎結石に 11 例(腎部 8、腹部 2、腰部 1)、膀胱結石に於ては、7 例(腰部 2、下腹部 5)、尿管結石に 3 例(腎部 1、腹部 1、尿管に沿つて 1)見られた。